

国語科専門用語の意味記述に関する教材開発的研究

Development of teaching materials on semantic descriptions of technical terms
in Japanese language education

松川利広、上明代千恵子、岡島眞寿美、土江和世、原井葉子、星合智賀子

Toshihiro Matsukawa, Chieko Uemyodai, Masumi Okajima,
Kazuyo Tsuchie, Yoko Harai, Chikako Hoshiai

奈良教育大学大学院教育学研究科教職開発専攻

School of Professional Development in Education, Nara University of Education

1. はじめに

本稿は、国語科専門用語の意味記述のあり方を教材開発的視座から提起するものである。

国語科専門用語とは、国語科の学習指導を展開するうえで指導者のみならず学習者にも、その習得・活用が求められる国語科独自の基本的な用語のことである。

どのような用語が、国語科専門用語の候補として挙がっているのか。カテゴリーを①言語、②理解、③表現、④読書と4つに分け、その一部を挙げる。①には「主語」「修飾語」「段落」「敬語」「音読み」「かかる」など ②には、「説明」「描写」「登場人物」「要点」「伏線」「心情」「文章構成」「翻訳」「さす」など ③には、「意見」「小見出し」「引用」「たとえ」「箇条書き」「結び」など ④には、「書名」「著者」「図書カード」「目次」「読本」など。

上記のように、国語科専門用語には、名詞型の他に動詞型があるのが特徴である。例えば「かかる」と「うける」のように対をなすものや、「さす」のように指示語的なものなどがある。学習者は、これらの用語の意味を適確に習得していないと、指導者の発問内容が理解できないばかりか学習者同士の話し合いに加わることも困難になる。

国語科専門用語については、四半世紀前から甲斐睦朗（例えば、『語彙指導の方法（語彙表編）』光村図書1983年）によって、その意義と重要性が指摘されてきたが、大きな進展がないまま今日に至っているのが現状である。

課題は2つある。一つは、国語科専門用語の選定と系統化、もう一つは、学習者側に立った国語科専門用語の意味記述のあり方である。

学習指導要領の改訂を機に刊行される用語解説書（例えば『これだけは身につけたい国語科基本用語』瀬川榮志編 明治図書2007年や『国語教育指導用語

辞典第4版』田近洵一・井上尚美編 教育出版2009年など）は、国語科専門用語の選定と個々の定義付けの一助にはなるが、指導者向けに記述された内容をそのまま学習者に提示することは困難である。

そこで、本稿では、学習者にとって理解しやすい国語科専門用語の意味記述のあり方を、具体的に教材開発（読み物化＝物語化）することによってその可能性を探求することにした。

2. 意味記述の実際

国語科専門用語の意味記述の一つとして、教材開発的アプローチを試みた。もとより教材開発は、発掘型と創作型に分類されるが、発掘型の場合、国語科専門用語の理解を容易にするため、一部リライトを行った。

私たちが目指すところは、「主語とは何か？」と問われたとき、例えば、次に掲げるような詩を用意（または暗唱）し、自分の言葉で詩の解釈と感想を述べたうえで「この詩の中の『ぼく（は）』が主語です。」と答え、次に「このように、主語とは、文の中の『だれは…』『何は…』にあたる言葉です。」と一般化できる学習者の育成にある。もちろん、この一般化の内容は、学年進級とともに進展することになる。

以上のことから、国語科専門用語の意味記述にあたっては、学習者が具体と抽象を統合できるような適切な内容であることが何よりも求められる。

練習問題 阪田寛夫

「ぼく」は主語です

「つよい」は述語です

ぼくは つよい

ぼくは すばらしい

そうじゃないからつらい

「ぼく」は主語です

「好き」は述語です
 ぼくは だれそれが 好き
 ぼくは だれそれを 好き
 どの言い方でもかまいません

「だれそれ」は補語です
 でもそのひとの名は
 言えない (『サッチャー』国土社 2002 年)

2.1. 国語科専門用語「かかる」(対象学年 小学校第3学年)

「かかる」って何？

「次の言葉は、あとのどの言葉にかかっていますか？」という問題があります。「かかる」とは、どういうことでしょうか。

次の文章を読んで、「えりまき」という言葉を手がかりに、『かかる』について考えてみましょう。

たろのえりまき

きたむら えり



きたむら えり さくえ

子ぐまのたろは、お母さんにえりまきをあんでもらいました。毛糸はひつじさんからもらった毛を赤い色にそめたのです。えりまきのはしには、たろの名前が書いてありました。「さあ、あたたかいのができました。大切にするんですよ」と、お母さんは言いました。

うさぎのな一ちゃんがあそびに来たので、たろはえりまきをして、うら山へそりすべりに行きました。

たろがそりのうしろにすわって、ひもをもち、な一ちゃんをだっこしました。そしてふたりは、山のてっぺんからすべりおりました。ぴゅーん！ 風を切つてすべります。雪けむりがあがって、まっ白い雲の中をとんでいるようです。

そこへ強い風がふいてきて、たろのえりまきがさっとふきとばされてしまいました。さあたいへん。たろとな一ちゃんはそりすべりをやめて、いそいでおいかけました。赤いえりまきはどンドンとんでいきます。そして山のむこうに見えなくなってしまいました。

たろとな一ちゃんが北の林までくると、すずめさんがたくさんいたので、たろは聞きました。「すずめさん。すずめさん。ぼくのえりまき見なかった。赤いえりまきだよ」「赤いえりまきだって。うーん。そういえば、どこかで赤いものを見たな」「ああそうだ。東の林の中でなにか赤いものを見たよ。きっとそのえりまきかもしれない」と、すずめさんたちは言いました。

「すずめさんありがとう」といって、たろとな一ちゃんは東の林に行ってみました。

すると林の木のえだにひっかかっていたのは山ぶどうの赤いかれはでした。たろはがっかりしました。

そこへちょうど通りかかったりすのおばさんに、たろは聞きました。りすのおばさんは、「赤いえりまき、そうそう、なにか赤いものを南の林の中で見ましたよ。きっとあれがえりまきだよ」と言いました。「おばさんありがとう」といって、たろとな一ちゃんが南の林に行ってみると、きつつきさんたちが木の上にあつまって、にぎやかに話をしていました。りすのおばさんが見たのは、きつつきさんのたちの赤い頭でした。

たろはがっかりして、きつつきさんたちに聞きました。すると一わのきつつきさんが、「赤いえりまきだって。ふーん。なにか赤いものを西の林で見ましたよ。あれがきみのえりまきかもしれない」と言いました。「きつつきさんありがとう」と言って、たろとな一ちゃんが西の林へ行ってみると、それはななかまどの赤いみでした。

ふたりががっかりして立っていると、「元気がないね。どうしたの」と、空から声が聞こえました。たろとな一ちゃんが見上げると、とびのおじさんが空をまわっていました。「たろの赤いえりまきが風にとばされたの。さがしてもどこにもないの」と、な一ちゃんは言いました。すると、とびのおじさんは、「赤いえりまきだって。山のふもととうんどう場で、赤いえりまきをしている子牛を見かけたよ」と言いました。「えっ。子牛さんが」たろとな一ちゃんは大声をあげました。「おじさんありがとう。ぼくたちすぐ行ってみます」と言って、たろとな一ちゃんはそりにのって、ぴゅんぴゅんとぼしておりました。

うんどう場が近づいてくると、白と黒の牛さんたちのなかに、赤いえりまきをした子牛さんが見えました。「子牛さん、子牛さん。そのえりまき、ぼくのだよ」と、たろはさくのそばにかけて行って言いました。

すると子牛さんはかなしそうに、「これきみのえりまきだったの。ぼく、前からこんなえりまきほしかったんだ。だからちょっとしてみたの。ごめんなさい」といって、えりまきをたろにかえてくれました。「うん、いいんだよ。ぼくもう見つからないのかとおもっていたんだ。ひろってくれてありがとう」と、たろはおれいを言いました。

そして、たろとなーちゃんは山へ帰りました。

つぎの日、だれかがとんとんと、たろの家の戸をたたきました。たろがあけてみると、大きなめ牛さんが立っていました。め牛さんはひつじさんからもらった毛糸をたろのお母さんにさし出して、「きのうはうちの子がたろちゃんのえりまきをおかりしましてありがとうございます。わたしはいそがしくてあの子にあんでやれませんが、どうぞおなじようなえりまきをあんでやってくださいませんか。毛糸はたっぷりあるとおもいますから、あまったらおつかいください」と言いました。

たろのお母さんは、その毛糸を赤くそめてあみました。ふわふわしたあたたかいたろとおなじえりまきです。のこりの毛糸で、お母さんは小さいえりまきをあんで、なーちゃんにもあげました。

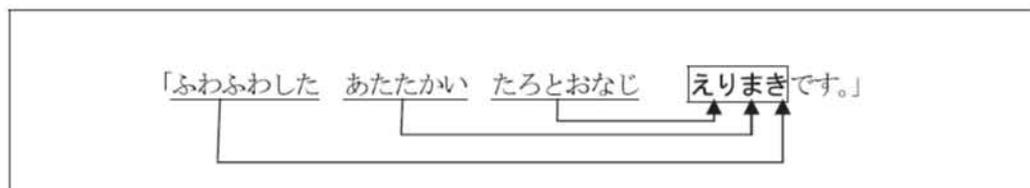
たろとなーちゃんは、えりまきを子牛さんにとどけに行きました。ふたりともえりまきをしっかりとくびにまいてまたそりですべて行きました。子牛さんは大よろこびで、「ありがとう」と言いました。「みんなおそろいだね」と、たろとなーちゃんは言いました。「とてもよくにあうよ」と、牛さんたちは言いました。

それから、たろとなーちゃんはミルクをたくさんおみやげにもらって、うちへ帰りました。

(きたむらえり作「たろのえりまき」 福音館書店 1973年・筆者が一部ひらがなを漢字に改変)

「えりまき」という言葉が、たくさん出てきましたね。点線でかこんだ中で、「えりまき」をせつ明している言葉をさがしてみると、「たろのえりまき」「赤いえりまき」「ぼくのえりまき」「そのえりまき」「ふわふわしたあたたかいたろとおなじえりまき」などがありました。「たろの」「赤い」「ぼくの」「その」「ふわふわしたあたたかいたろとおなじ」は、すべて「えりまき」をせつ明している「しゅうしょく語(部)」です。

それを『かかる』という言葉を使って言うと、たとえば「たろの」は「えりまき」に『かかる』、「赤い」は「えりまき」に『かかる』、「ぼくの」は「えりまき」に『かかる』、「その」は「えりまき」に『かかる』となります。また、つぎのようにいくつかの言葉が、ひとつの言葉に『かかる』場合もあります。



では、「えりまき」が何かに『かかる』場合はないでしょうか。それもあります。たとえば、「えりまきをあんで」では、「えりまきを」は「あんで」にかかります。また、「えりまきの子牛さんにとどけに行きました。」「えりまきをしっかりとくびにまいて」では、「えりまきを」は「とどけに」や「まいて」にかかっています。これらの場合「えりまきを」どうしたかと考えるのです。

このように一つの言葉が他の言葉とむすびつく場合に、前の言葉は、後の言葉に「かかる」といいます。

また、後の言葉は、前の言葉を「うける」といいます。しゅうしょく語はひしゅうしょく語に「かかり」、ひしゅうしょく語はしゅうしょく語を「うける」といいます。

(上明代千恵子)

2.2. 国語科専門用語「意見」(対象学年 小学校第3学年)

みなさんは、話し合いをするときに、自分の「意見(いけん)」を友だちにつたえますね。話し合いをじょうずにすすめるには、どのように「意見」をつたえるとよいのでしょうか。「きらきら森の動物会ぎ」の話し合いをもとに考えてみましょう。

「きらきら森の動物会ぎ」	
くま	「今日は、音楽会の出しものについて話し合います。きょ年の反省から今年の出しものは、森の動物たちみんながさんかできるもので考えたいと思います。みなさん、何か意見はありませんか。」
ぞう	「今年の音楽会は、合そうがいいです。 <u>その理由は、みんなでさんかできるからです。みんなでいっしょに樂きをえんそうしたらきっと楽しいはずです。</u> 」
さる	「わたしもぞうさんの意見にさんせいです。合そうでしたら、みんなできょう力してさんかできますね。わたしは、トランプペットがとく意なのでぜひえんそうしたいです。」
くま	「合そうをしたいという意見が出ています。このことについて何か意見はありませんか。」
きつね	「わたしは、合そうをすることにはんたいです。そのわけは、わたしが、樂きをひくのがにが手だからです。 <u>それよりわたしは、合しようをしたいです。</u> 歌なら、樂きがにが手な人も樂しめると思っています。」
くま	「 <u>きつねさんの意見に対して、何か意見はありませんか。</u> 」
ライオン	「はい、はい、はい。 <u>練習は、毎日したほうがよい</u> と思います。なぜなら、練習をたくさんしたらじょうずになるからです。」
くま	「ちょっと待ってください。ライオンさん、その意見は、出しものがきまってからにしてください。ちょっとせい理しますね。今、合そうと合しようという二つの意見が出ています。みんなでいっしょにさんかできるというのはどちらも同じなのですが、意見が分かれちゃったねえ。」
うさぎ	「あとう、わたしは歌や樂きのえんそうはとくいではありません。ものを作ったりするのはとくいなのですが。」
たぬき	「今年は、動物たちぜんいんで、音楽げきをしたらよいと思いません。なぜなら、音楽げきなら樂きの演そうも歌もりよう方できるからです。 <u>その上、音楽げきだどげきのぶ台そうちやいしようなどのたん当もいります。</u> うさぎさんは、自まんのうで、ぶ台そうちを作ってください。みなさんいかがですか。」
みんな	「それは、いい意見ですね。それなら、みんなでさんかできますね。」
くま	「では、みなさんの心をひとつにして、思い出にのこるすてきな音楽会にしましょう。」

「意見」を言った後、その「理由」をつけくわえていますね。

「さんせい」の立場をはっきりさせて意見を言っていますね。

「反対」の立場をはっきりさせて、ちがう「意見」をつたえていますね。

「きつねさんの意見に対する意見ではありませんね。」

ほかの人の「意見」をとり入れて、よりよい「意見」を考えていますね。

どうやら、「きらきら森の動物会ぎ」では、動物たちの意見がまとまったようです。そもそも、「意見」とは、いったい何のことでしょう。

「意見」とは、何かの問題について自分が考えたことです。

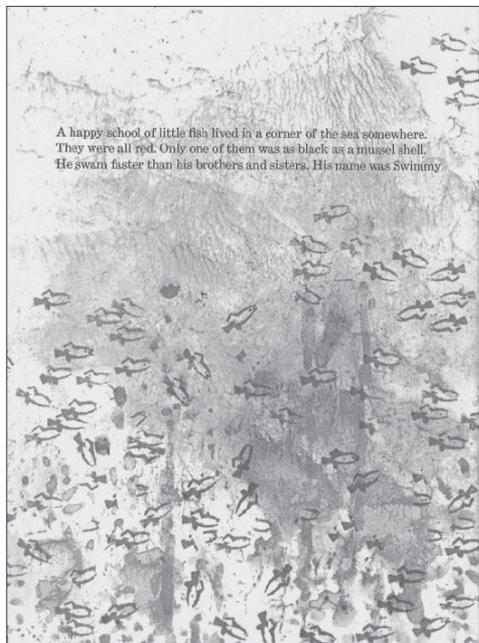
その「意見」に、さんせいの人も反対の人もいます。ちがう立場の人にも、自分の意見を「なるほど。」と思ってもらうには、「なぜそう考えたのかきちんと理由がたえられる」ことが大切です。

みなさんも、話し合いをするときに、自分の「意見」がうまくつたわるように考えて、話し合いにさんかしましょう。
(岡島眞寿美)

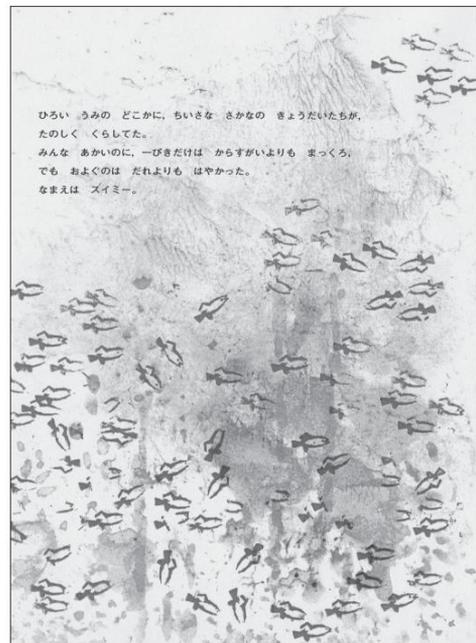
2.3. 国語科専門用語「訳」(対象学年 小学校第5学年)

「訳」とは、どういうことでしょうか。

英語で書かれた「Leo Lionni (レオ=レオニ)」の「Swimmy」(スイミー) と、日本語の「谷川俊太郎訳」の「スイミー」を比べてみましょう。



Leo Lionni, 「Swimmy」
Random house, Inc.



レオ=レオニ 「スイミー」
訳 谷川俊太郎 好学社

「Swimmy」の話は、英語から日本語に訳されています。「訳」とは、ある国の言葉を他の国の言葉になおすことです。他のいろいろな国の言葉を日本語になおすこともあります。逆に、日本語から外国語になおすことも「訳」です。

しかし、ただ意味が合うようになおすだけではありません。たとえば、英語から日本語になおす時、「His name was Swimmy.」は、その語句の意味通りに訳すと「かれの名前はスイミーでした。」となりますが、谷川さんは、「名前はスイミー。」と訳しました。これは、英語の文末と同じように、日本語の文末も「スイミー」と名詞で止めることにより、「スイミー」という名前の強調と「スイミー」という音がもたらす効果が考えられているからです。そうすると声に出して読んだ時に、海の中をスウィ、スイィとすばやく泳いでいるスイミーの様子を思いうかべることができます。「スイミー」と言い切ることにより生まれる音の余いんが、スイミーの機びんな泳ぎのイメージを引き起こすのです。谷川さんは、音のひびきやリズムを大事にしながらか訳していることが分かります。

絵本だけではなく、字ばかりの本や、映画のせりふも訳されます。その時も、「Swimmy」の絵本のように一文一文を工夫しながら訳します。「訳」す人は、ただ言葉をなおすだけではなく、元の作品の世界を読み取って、作った人の思いや願いがどのように伝わるかを考えながらか訳します。

訳された作品は、作者と訳した人の共同作品といえます。
(土江和世)

2.4. 国語科専門用語「せつめい」(対象学年 小学校第2学年)

2.4.1. 「せつめい」ってなあに？

	たかしさんがぶんぶん ごまを作ってあそんで いるところに、なつき さんがきました。		
			先生は、二人が話してい るようすを見ていまし ました。
なつき	じょうずにまわしているね。わたしも、作っ てあそびたいな。どうやって作ったらいいの ?作り方を教えてくれる?		たかしさんはいつもぶんぶんごまを作っ てあそんでいます。なつきさんは作っ たことがないですね。
たかし	いいよ。 はじめに、紙を円く切るよ。 つぎに、まん中に2つあなを空けるよ。 さいごに、そのあなに糸をとおしてむすぶと できあがりだよ。		たかしさんは、つくるじゅんばんに、「は じめに」「つぎに」「さいごに」などのじゅ んじょをあらわすことばをつかってつた えていますね。なつきさんは作り方がわか ったかな。
なつき	作り方のじゅんばんはわかったんだけど…。 紙の大きさや糸の長さはどれくらいにすれば いいのかな?それから、あなを空けるいち はどこかな?		なつきさんは、紙の大きさ、糸の長さ、あ なを空けるいちがわからなかったの ですね。
たかし	じゃあ、こんどは図にかいてあげるよ。紙の 大きさは…		たかしさんは、なつきさんがわからなかつ たところを図にかきましたね。
なつき	ありがとう。よくわかったよ。これから作っ てみるね。		なつきさんは、ぶんぶんごまの作り方がわ かったようですね。

このように、あることについてよく知っている人が、そのことを知らない人に、わかりやすく話したりかいたりして、あい手がわかるようにすることを「せつめい」といいます。

2.4.2. 「せつめい」に大切なことは？

① あい手のこと

「せつめい」するときには、あい手のことを考えることが大切です。

- ・あい手は、どんなことを知りたいのかな？
- ・あい手は、どんなことを知っているのかな？知らないのかな？
- ・あい手にどんなことばや文字をつかいたらわかるかな？

など、あい手の気持ちや立場になって「せつめい」のしかたを考えましょう。

同じことを「せつめい」するのにも、あい手が1年生のとき、6年生のとき、お家のかたのときでは、つかうことばやつたえかたがちがいますね。



② 「せつめい」する内よう

「せつめい」する人は、あい手が知りたいことに答えられるように、「せつめいする内よう」についてよく知っておかなければなりません。

そのために、前もってしらべておく、じぶんでやってみるなどのじゅんぴをしておくことが大切です。そのときに、ノートやカードにメモをとったり、絵や図をかいたりしておくといでしょう。



③ 「せつめい」のじゅんじょ

あなに糸をとおします。
そのあなは、紙のまん中に2つ空けます。
その前に、紙は、円く切っておきます。

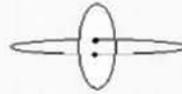


このような「せつめい」はどうでしょうか？ いったい何から先に作ればよいのか、わかりにくいですね。わかりやすい「せつめい」をするには、「じゅんじょ」が大切です。

あいてがわかるように、「せつめい」する「じゅんじょ」を考えましょう。

④ 絵や図をつかった「せつめい」

はじめに、紙を円く切ります。
つぎに、まん中に2つあなを空けます。
さいごに、そのあなに糸をとおしてむすびます。



このように、図を使って「せつめい」すると、ぶんぶんごまの作り方がよくわかります。

「せつめい」するときには、絵や図をくふうして使うといですね。



2.4.3. どんな「せつめい」があるの？

カンガルーの赤ちゃんは、お母さんカンガルーのふくろの中で生まれるの？

カンガルーの赤ちゃんは、お母さんカンガルーのおなかの下にある「さんもん」から生まれます。生まれたばかりのときは赤はだかで、2センチぐらいです。お母さんは、赤ちゃんが生まれる前に、自分のおなかやふくろをなめて、赤ちゃんがとおる道すじをつくります。赤ちゃんは、前足のつめをつかって、自分の力でお母さんのふくろの中までよじのぼり、ふくろの中にあるおちちをのんでそだちます。



これは、「カンガルーの赤ちゃん」についてせつめいした文しょうです。このような文しょうを「せつめい文」といいます。国語でべんきょうした「どうぶつ赤ちゃん」や「たんぼのちえ」もせつめい文です。

「あそび方のせつめい」、「すきなもののせつめい（自分のせつめい）」、「読んだ本のせつめい」、「かかりのしごととせつめい」、「かっている生きもののせつめい」、「わけのせつめい」など、生活の中で「せつめい」をすることはたくさんあります。あい手が、「なに？」「なぜ？」とぎもんに思ったことについて、わかりやすく答えることが「せつめい」なのです。



〔引用文献〕 町田槌男「知っているときと役に立つ生き物クイズ 114」 黎明書房 2002

(原井葉子)

2.5. 国語科専門用語「敬語」(対象学年 小学校第5学年)

みなさん、今日は「敬語(けいご)」についてのお話です。

小学校5年生の太郎(たろう)くんと2年生の華子(はなこ)ちゃん兄妹は、生まれて初めて飛行機に乗っておじいちゃんとおばあちゃんのいる北海道へ行きます。太郎くんは「敬語」を使って話もできるしっかり者。華子ちゃんは、ちょっとあまえんぼうなおてんばさん。2人は飛行機のぞ席にすわってワクワクしています。さてさて、どのような旅になるのでしょうか？！

2.5.1. 「敬語」ってどんな時に使うのかな？

(となりの席のおばさんが二人に話しかけてくる)

おばさん : 「あんたたち二人だけなの？二人でどこ行くの？」
 華子ちゃん : 「おじいちゃん家！」
 太郎くん : 「こら、華！お母さんが目上の人にははていねいに話さないって言ってたぞ。(おばさんに向かって)祖父の家に行きます。」
 おばさん : 「さすが、お兄ちゃん。しっかりしているねえ。」



太郎くんは、初めて会った自分より目上のおばさんに対して、敬語を使って話をしています。「目上」というのは「自分より地位や年れいが上である」人のことを言います。でも、それだけではありません。



客室乗務員 : 「こんにちは。太郎くんと華子ちゃんですね。私、客室乗務員の小畑と申します。まもなく陸しますので、シートベルトをおしめくださいね。」
 太郎くん : 「こんにちは。お願いします。」
 華子ちゃん : 「うわあ、きれいなお姉さん」
 客室乗務員 : 「まあ、華子ちゃん、ありがとうございます。うれしいです。」

太郎くんは目上の小畑さんに敬語を使っています。でも客室乗務員の小畑さんも太郎くんたちに「敬語」を使って話しています。なぜでしょう？

それは、「客室乗務員」という立場のためです。飛行機の中で太郎くんたちは「お客さん」です。小畑さんはお客さんをもてなす立場にあります。もし、となりのお家のお姉さんだったら、太郎くんたちに「敬語」を使って話したりしないでしょうね。太郎くんも親しいおばさんや、お姉さんだったら「敬語」を使わないでしょう。

このように、年れいや親しさ、立場によって生じる「人間関係」や状況に応じて「敬語」は使われるのです。

2.5.2. なぜ「敬語」って使うのかな？

太郎くん : 「おばさん、ハンカチが落ちましたよ。」
 (足下のハンカチを拾ってわたす)
 おばさん : 「おやおや、気付かなかった、どうもありがとうね。お兄ちゃんは、何年生なんだい？」
 太郎くん : 「小学5年生です。妹は2年生です。」
 おばさん : 「そうかい、言葉づかいのきちんとした、いい子だねえ。」
 華子ちゃん : 「ねえ、どうしてそんなにお兄ちゃんをほめるの？」
 おばさん : 「お兄ちゃんは敬語でおばちゃんに話してくれているんだ。敬語を使うとね、相手のことを気づかう気持ちが表れるんだよ。にっこり笑って、こんな気持ちのいい言葉をかけてくれたら、うれしいじゃないか。」





華子ちゃん：「ふ～ん、敬語ってすごいんだ。」
 太郎くん：「そうか、だからお母さん、いつも言葉は心の鏡、大切にしないで言うんだね。おばさん、ありがとうございました。」
 おばさん：「いえいえ、どういたしまして。」

「敬語」は相手の人を大切に思ったり敬（うやま）ったりする気持ちを伝えるために使う言葉です。相手に合わせて「敬語」を使うと、自分が相手のことを思いやっている「気持ち」が伝わるので、相手にも喜んでもらえるのです。おたがいが気持ちよくなるように「敬語」は使われます。

2.5.3. 「敬語」には、どんな種類があるのかな？

客室乗務員：「太郎くん、華子ちゃん、お飲み物はいかがですか？オレンジジュースやアップルジュース、お茶もございますよ。」
 華子ちゃん：「わあ、おねえさんありがとう。華はオレンジジュース！」
 太郎くん：「ぼくは、アップルジュースをお願いします。」
 客室乗務員：「はい、オレンジジュースとアップルジュースですね。それから、太郎くんと華子ちゃんに差し上げようと、クッキーを用意いたしました。今、めし上がりですか？」
 太郎くん：「どうする、華。食べる？」
 華子ちゃん：「うん。今すぐ食べたい！」
 太郎くん：「じゃあ、いただきます。ありがとうございます。」
 客室乗務員：「うけたまわりました。ただいまお持ちいたしますね。」



太郎くんと客室乗務員の小畑さんの言葉には、たくさんの敬語がふくまれています。例として客室乗務員の小畑さんの言葉を取り上げてみましょう。

差し上げようと、クッキーを用意いたし ました。今、めし上がり ますか？
 (謙讓語) (謙讓語) (丁寧語) (尊敬語) (丁寧語)

「尊敬語（そんけいご）」は、相手や話題になっている人の動作やその状態、ものごとなどを高めて言い、敬う気持ちを表す言葉です。ここでは客室乗務員の小畑さんが「めし上がる」という言葉を使っています。「めし上がる」は、太郎くんや華子ちゃんの「食べる」という動作を高めて言う言葉で、お客さんである二人を敬う気持ちを表しています。

「謙讓語（けんじょうご）」は、自分や自分の身内の動作やものごとなどを低めて言い、相手を敬う気持ちを表す言葉です。ここでは「差し上げる」「いたす」という言葉が使われています。「差し上げる」は小畑さんが「あげる」という自分の動作を低め、お客さんである二人を敬う気持ちを表しています。「いたす（する）」も同じです。

「丁寧語（ていねいご）」は、丁寧に言うことで、相手を敬う気持ちを表す言葉です。ここでは文末に「ます」「まし（た）」をつけ、小畑さんがお客さんである二人を敬う気持ちを表しています。

つまり、ここでは客室乗務員の小畑さんが尊敬語、謙讓語、丁寧語という言葉を使って、お客さんである二人を大切に思う「気持ち」を伝えているのです。

太郎くんが小畑さんに言う言葉の文末にはすべて「ます」という丁寧語がついています。そして、「いただく（もらう）」という謙讓語も使っています。みなさんがご飯を食べる前に言う「いただきます」も実は敬語なのです。

少し敬語についてわかりましたか？みなさんも、周りの大人の言葉に耳をすましてみてください。そして、太郎くんのようにちょっと気をつけて敬語を使い、気持ちよく会話してみませんか？



(星合智賀子)

3. まとめ

第2章では、国語科専門用語の意味記述例を教材開発の観点から記した。形式は五者五様であるが、各執筆担当者の知識と実践経験を踏まえたオリジナリティのある内容になっている。

2.1. 「かかる」は、学習者を悩ます、動詞型国語科専門用語の一つである。この場合、「たろのえりまき」の全文を掲げ、「えりまき」の存在を物語の展開と結びつけながら「かかる」の働きを説明しているところがポイントである。また「えりまき」を核にすることにより「かかる」と「うける」の関係把握が容易に行える仕掛けになっている。このように、意味記述にあたっては、例文型ではなく作品型の方が効果的であると言える。

2.2. 「意見」は、日常語として浸透しているため、あまり注意を払わなくなっている国語科専門用語の一つである。創作「きらきら森のどうぶつ会ぎ」では、会議の進行に沿って、いろいろな意見を例示しながら、意見にはいろいろな型(①意見を言ったあと、その理由をつけくわえる。②賛成や反対などの立場をはっきりさせる。③反対のあと、ちがう意見を伝える。④ほかの人の意見を取り入れて、よりよい意見を考える。⑤みんなの意見をまとめて結論を出す)があることを導いている。このように具体的な意見に対するメタ認知的記述は、学習者が自らの意見(内容や型)をモニタリングするうえでよい作用をもたらすであろう。

2.3. 「訳」は、言語意識や異文化理解、国際理解などを射程に入れた意味記述である。将来的には、「訳す(=翻訳)」の意味記述は、外国語活動との協働から産出される方向へと向かうことになるであろう。

2.4. 「せつめい」は、日常語として様々な場面や文脈で使われる国語科専門用語の一つである。それだけに、初出の学年での意味内容の理解が重要となる。この場合、対話例を用いて「このように、あることについてよく知っている人が、そのことを知らない人に、わかりやすく話したりかいたりして、あい手がわかるようにすることを『せつめい』といいます。」と定義付けへとつなげているところがポイントである。この対話例の中には、「説明」に大切なこと(相手のこと、説明する内容、説明の順序、絵や図を使った説明)が包含されているため、学習者は「せつめい」を求められたとき、この対話例を想起しながら「大切なこと」を落とさないで「せつめい」することができるようになるであろう。

2.5. 「敬語」は、よりよい人間関係を形成するうえで、小学校段階から身に付けさせたい待遇表現である。従来、「敬語」の学習は、語レベルの言い換えを中心としてきたため、知識はあっても使えないという恨みが

あった。ここでは、華子ちゃん、太郎くん、おばさん、客室乗務員を登場させ、尊敬語、丁寧語、謙譲語の働きを、物語性のある小話を通して理解できるように工夫している。特に謙譲語と尊敬語の誤用は、今日的課題であり、国語科専門用語としての確かな「敬語」の習得が求められている。「敬語の指針」(文化審議会答申、平成19年2月2日)によれば、敬語は、尊敬語、謙譲語Ⅰ・Ⅱ、丁寧語、美化語の5種類に分類されたが、小学校段階における国語科専門用語としては、新しい分類法のベースとなっている従来の3種類(尊敬語、謙譲語、丁寧語)の方を採った。

なお、第2章の漢字表記は、原則として学年別漢字配当表に従ったが、一部読み仮名を振ることを前提に上の学年の漢字を使用したところがある。

今回は、意味記述の妥当性や客観性を評価・検証することはできなかった。今後の課題としたい。

本稿は、2009年度教職大学院に入学した5名の現職院生と松川の共同研究の成果報告である。与謝野鉄幹にならい、「五足の赤い靴の会」と名付け、月1回の割合で、地に足をつけながらゆっくり丁寧にディスカッションを重ねてきた。校種が、小学校・中学校・高等学校にわたっていたことが幸いし、常に学習者の言語発達が意識されていたように思う。